

＜京都産業学センター・共同研究プロジェクト紹介＞

京都まちづくり研究

龍谷大学経済学部教授

辻田 素子

京都市を訪れる観光客は年間 5000 万人を超えています。2014 年には、過去最高の 5564 万人を記録、外国人宿泊客も 182 万人を突破し、米国の有名旅行雑誌「Travel + Leisure (トラベル・アンド・レジャー)」が発表する世界の人気観光都市ランキングでは、栄えある 1 位に輝きました。同ランキングは、読者投票がベースで、「風景・名所 (sights/landmarks)」、「文化 (culture)」、「食 (food)」、「人 (friendliness)」、「買い物 (shopping)」、「価値 (value)」の 6 項目で採点されています。

この世界の人気観光都市ランキングで京都は 2015 年も 1 位を守りましたが、2016 年は 6 位に転落してしまいました。2016 年の京都の点数は、2015 年より 1.47 点低い 89.75 点で、1 位の米国・チャールストン (91.66 点) とは 1.91 点の差がありました。

伏見稲荷大社や清水寺といった有名観光地だけでなく、そこにたどり着くまでの道路やバス、鉄道などの混雑が、悪影響を及ぼしたとみられています。京都市が「観光客 5000 万人構想」を計画した 2000 年当時、年間の観光客数は約 4000 万人 (外国人宿泊客は 40 万人弱) でした。京都は、閑散期に人を呼ぶためのイベントを新たに企画し、「歩くまち・京都」をスローガンに歩行者と公共交通機関を優先する施策も展開してきましたが、急増する観光客に十分に対処しきれていないことが、ランクダウンの一因と推察されます。

こうした中、共同研究プロジェクト「京都まちづくり研究」では、2016 年 7 月 12 日に、四条繁栄会会長の堀部素弘氏をお招きし、「歩くまち京都・四条繁栄会におけるまちづくり」についてご講演いただきました。四条繁栄会は四条通に面した組合員数 250 を超える市内最大の商店街です。四条通の歩道拡幅事業が 2015 年 10 月末に完了したこともあり、同商店街がまちづくりに果たしてきた役割や「歩くまち・京都」のシンボル事業ともいえる歩道拡幅の成果を教示いただくのが目的でした。

四条繁栄会のまちづくりは21世紀に入ってから加速しました。2001年に商店街としての「基本理念」を制定し、まちに対する強い責務を内外に示しています。そこでは、自らを「新しさと伝統に加え独自性を重視する商店集団」として位置づけるとともに、「『風格』あるストリートとしての環境整備を常に心がけ、それにふさわしい構造、空間、店舗の姿、魅力ある商店機能・情報発信力を持つ『まち』とする」と表明しています。

2002年には、四条通を風格と華やぎのある京都を代表する商業・業務空間にするために「地区計画」を策定し、2003年にはイタリア・フィレンツェの観光局長を招いてシンポジウムを開催、駐輪や駐停車の実態調査や歩行者などへのアンケート調査も実施しました。こうした取り組みの過程で、「交通」が重要課題として浮上し、2004年には、不法駐輪や不法駐車を一掃して、バスの運行や歩行者に与える影響を探る交通社会実験まで行いました。当時、四条通の歩道は狭いうえに不法駐輪で歩きづらく、不法駐車が目立つ車道は渋滞が常態化していたからです。

四条繁栄会はこうした実態を踏まえ、2005年12月に「心地よく歩ける四条通の実現に向けた要望書」を京都市に提出、それを受ける形で、翌年、地元住民や商業者、交通事業者、学識経営者、行政からなる「歩いて楽しいまちなか戦略推進協議会」が設置されました。その後10年近く議論を重ねた結果、片路二車線のうちの一車線をつぶして歩道を拡張し、誰もが安心して歩ける、そして、歩いて京都のまちの魅力を満喫できる空間が創出されたのです。

堀部氏は「四条通の歩行者数は増加しており、まちづくり効果がでている」と評価しつつも、次のステージでは、「人を大切にする、もてなし・商い・街路空間の創造」をテーマに、魅力的な店舗の誘致、質の高い個店の育成、低未利用地の活用などに力を入れたいとしています。

「四条通境界のまちづくりは皆で将来のイメージを共有し、『まちは市役所だけが考える』のではなく、自分のまちは自分で考えて、『こういうまちにしていこう』という姿勢で取り組む必要があります。歩いて楽しいまちは、まちにとって一番大きな要件です。まちの主役はそのまちを訪れる人であり、街路空間の利用を考える上で一番よいのは、その主役が楽しめる空間

にすることです」

「四条通には多くのポテンシャルがあります。四条通の商業空間は文化、施設、歴史のイメージを強く発信しています。この商業空間が持つメッセージを生かすことが 21 世紀の京都にとっても大きな資産になります。合意してよいまちをつくるには、皆さんの少しずつの我慢と節度が必要になってきます」

四条繁栄会では、基本理念や地域計画を通じて、さらにまた、シンポジウムや社会実験といった地道な活動を通して、組合員の間で、まちを訪れる人を楽しんでもらいたいという意識が強化され、共有されてきたことがよくわかりました。また、こうした取り組みが、快適な観光環境につながると考えられます。